

マタイ 2:1-12 「三博士の礼拝」

「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである』 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った」

三人の博士たちは星に導かれ、幼子イエスにご挨拶するために、遠路はるばる旅して来ました。幼子イエスにお献げする貴い宝物を携えて、何日もラクダに揺られながらやって来ました。長い旅は、ほんとうに大変なことです。その大変なことを、博士たちはちっとも大変とは思いませんでした。むしろ、星が輝いて幼子イエスの居場所をはっきり指し示すのを見て、博士たちの心は大きな喜びにあふれた。そう聖書は告げています。長い旅の苦労を、全部喜びに変えてしまう。幼子イエスとの出会いには、そのような不思議があります。

わたしたちもまた、主イエスキリストを求めて人生を旅している、という意味で、三人の博士たちに似ているかもしれません。わたしたちの中のある人は、もう小さい子どもの時から何度も福音を聞かされて、自然にイエス様に出会っ

た、という人がおります。また、わたしたちの中のある人は、人生の旅路において、苦勞して、苦勞して、どこかに救いはないだろうかと探し求めながら、それでもなお苦勞して、苦勞して、ようやく人生の後半にさしかかったところで福音に出会って救われた、という人もおります。

しかし、ひとたびイエス様に出会ってしまいますと、過去の苦勞は、もう苦勞ではありません。イエス様に救われたことの喜びが大きいゆえに、過去の人生の苦勞が、全部喜びにとは言わずとも、多くの部分がお恵みに、変えられてしまうのです。

いったいわたしたちは、自分の過去を変えることはできません。過去にあったことを、無かったことにしてしまうのは、できません。ですけれども、過去の記憶は、変えられることが出来るのです。三人の博士たちが、幼子イエスに出会ったその瞬間、長旅の苦勞がすっかり喜びにのみ込まれてしまったように、わたしたちの苦勞多い人生も、イエス様と出会った喜びにのみ込まれて、わたしたちの過去の記憶が、変えられてしまうのです。

イエス様との出会い。その大きな喜びのゆえに、わたしたちの過去の記憶は、変えられることができる。このことを今日、第一におぼえたいと思います。

さて、東の空に星が現れいでたとき。星が動いて、行く手を示したとき。星が目指す場所の上にとどまったとき。三人の博士たちは、その星が世界に対して何を語りかけているのかを、正しく読み取ることのできる、知識と知恵とを持っておりました。三人の博士たちは、夜空の星のすべての動きを毎夜毎夜、注意深く観察し、計算し、予測を立て、いにしえの先人たちが書き残した多くの書物と丁寧に照らし合わせ、星が世界に何を指し示すのかを読み取ることのできる、天文学者でありました。これは当時における最先端の学問でありました。知識の中の知識、知恵の中の知恵。知識における最高峰であり、知恵における最高峰でありました。東の空にひとときわ輝く星が現れいでたとき、星が、世界を救う救い主のお誕生を告げていることを、三人の博士たちは、すぐに把握し、理解することができました。

ところが、三人の博士たちは、星が指し示すメッセージを読み取って、ただ理解するだけで満足してしまう人たちではありませんでした。星のお告げを正確に理解して、それで事足れり、とってしまう人たちではありませんでした。星がまさに指し示している、そのところのお方、星がまさに指し示している、目当てたるべきお方、主イエスキリスト。その主イエスキリストと、顔と顔と合わせてお会いするまでは、三人の博士たちは決して満足することが出来なかったのです。

三人の博士たちは、星の知識でもって、満足したのではありません。三人の博士たちは、星の知恵でもって、満足したのではありません。星がまさに指し示している、そのところのお方、星がまさに指し示している、目当てたるべきお方、主イエスキリスト。主イエスキリストご自身を得て、初めて三人の博士たちは、満足することが出来たのです。

わたしたちは、三人の博士のようであるでしょうか？ わたしたちは、いろいろなことを通して、メッセージを受け取っております。わたしたちは、教会の生活において、いろいろなことを通して、神からの語りかけというものを、受け取っております。聖書を通して、メッセージを受け取っております。賛美の音楽を通して、メッセージを受け取っております。信仰の友のあかしを通して、メッセージを受け取っております。わたしたちは、そうした語りかけを、聞いて、理解して、それだけで事足れり、としまっていないのでしょうか？ 礼拝に出席して、そこで語られ、あかしされ、歌われたことを聞いて、理解して、それだけで事足れり、としまっていないのでしょうか？

三人の博士たちは、星がまさに指し示している、そのところのお方、主イエスキリストと個人的にお会いするまで、決して満足することが出来ませんでした。はるばる旅をして、イエスキリストを求めて、ひたすらイエスキリストを求めて、進み続けました。そのようにして博士たちは、ほんとうに主イエスキリストに親しくまみえることが出来たのです。

わたしたちにとって、ほんとうに重要なこと。それは、聖書そのものが重要なのではなくって、聖書がまさに指し示しているところのお方、主イエスキリス

トご自身が、重要なのであります。わたしたちにとって、ほんとうに重要なこと。それは、賛美の音楽や、信仰の友のあかしそのものが重要なのではなくって、賛美の音楽がまさに指し示しているところのお方、信仰の友のあかしがまさに指し示しているところのお方、主イエスキリストご自身がこそが、重要なのです。

三人の博士たちは、星に導かれて進み続け、ついに主イエスキリストと個人的にお会いすることが出来ました。こうして、喜びに満ちあふれることが出来ました。わたしたちもまた、主イエスキリストと個人的にお会いするという尊い経験をこの身に味わうまで、進み続けて行くものでありたいと思います。これが、今日わたしたちが心にとめたい、第二の点であります。

さて、三人の博士たちは、幼子イエスにお会いしたとき、地にひれ伏して拝みました。三人の博士たちは、幼子イエスのみまえて、自分自身を降ろし、自分自身を低くし、幼子イエスを救い主と認めて拝むことのできる者であったのです。

先ほど申し上げましたように、天文学者でありました三人の博士たちは、当時の最先端の人々であり、知識における最高峰、知恵における最高峰でありました。彼らは「ものごとの道理を深く究めている人々」でありました。「ものごとの道理を深く究めている人々」であればこそ、彼らは、星を読み取って、幼子イエスのおられる場所を正確につきとめることが出来たのです。

しかし、往々にして知識は人を高ぶらせ、往々にして知恵は人を慢心させます。「ものごとの道理を最も深く究めているのは、このわたしであって、ほかの誰でもない」という、高ぶり、慢心、高慢に至るには、ほんの髪の毛一本分の差ほどしかありません。

ところが、三人の博士たちは、幼子イエスにお会いしたとき、自分たちの知識、自分たちの知恵を、足下に降ろすことができたのです。自分たち自身、自分の自己というものすらも、降ろすことができたのです。自己を降ろすことが出来ればこそ、彼らは幼子の前で額を地面にこすりつけるようにして、伏し拝むこ

とが出来たのです。

わたしたちは、三人の博士たちのようであるでしょうか？ わたしたちもまた、主イエスキリストと個人的に出会うためには、博士たちと同様に、自分の知識、自分の知恵というものを降ろして、幼子イエスに対してひれ伏すことが出来るのでなければなりません。

わたしたちにとって、知識は大切であり、尊ぶべきものであります。わたしたちにとって、知恵は大切であり、尊ぶべきものであります。知識は決して信仰と対立するものではありません。知恵もまた決して信仰と対立するものではありません。むしろ、わたしたちに知識があり知恵があればこそ、わたしたちは、主イエスキリストに出会うための道を進むことが出来るのです。もし誰かが聖書をわたしたちに読み聞かせてくれたところで、わたしたちの側に、知識がなく知恵がなければ、どうして読み聞かせられた内容を理解できるでしょうか？

それゆえ、わたしたちは知識や知恵を決して軽んじてはなりません。三人の博士たちは、最先端の学者たちでありました。博士たちは、決して知識や知恵を軽んずる人たちではありませんでした。もし軽んじていたならば、ラクダに乗って1000年さまよったところで、幼子イエスをみつけることは出来なかったでしょう。知識と知恵の助けがあればこそ、星を読み取って、幼子イエスをみつけることが出来たのです。

しかし、三人の博士たちは、決定的に重要な点においては、知識も知恵も、自分自身すらも、降ろすことの出来る人たちでありました。

決定的に重要な点とは、このような点です。すなわち、主イエスキリストを、わたくしの救い主として信じ、受け容れ、お迎えするという、この一点において、自分の知識も知恵も、自分自身すらも、降ろすことが出来る、ということです。

この無力な小さな幼子が、救い主である、ということ。この大工のせがれが、救い主である、ということ。尋問するサンヒドリンの議員やポンテオ・ピラト

の面前でじっと黙ったまま無力に鞭打たれ殴られ苛められているこの人が、救い主である、ということ。まったく無抵抗のまま十字架に釘付けられて殺されてしまったこの人が、救い主である、ということ。無惨な姿となって冷たい墓に葬られたこの人が、三日目に復活して出て来た救い主である、ということ。

このことに対して、わたしたちが「アーメン、そうです。主よ、あなたこそわたしの救い主です」と言えるようになるためには、わたしたちは、自分の知識と知恵を降ろさなければなりません。なぜなら、この救いの出来事は、わたしたちの日常的な知識や知恵から、学問的な知識や知恵から、世間的な知識や知恵から、大きくかけ離れているからです。

わたしたちは、三人の博士たちのようであるのでしょうか？ 博士たちが、幼子イエスの場所を正確につきとめることが出来たのは、知識と知恵のおかげであります。しかし博士たちは、尊い有用な知識、尊い有用な知恵が、主イエスと自分たちとのほんとうの出会いを妨げるように働くことは、決して許しませんでした。博士たちは、知識の限度、知恵の限度というものを、わきまえている人たちでありました。幼子イエスと出会う戸口のところまでは、知識と知恵が、お手伝いをしてくれます。戸口から一歩中へ入って、幼子イエスをほんとうに救い主として自分のうちにお迎えするためには、わたしたちは、へりくだらなければなりません。

自分の知識、自分の知恵、自分の自己というものを降ろすということです。この無力な小さな幼子が、救い主である、ということに、「アーメン、そうです。主よ、あなたこそわたしの救い主です」と言えなければなりません。この大工のせがれが、救い主である、ということに、「アーメン、そうです。主よ、あなたこそわたしの救い主です」と言えなければなりません。尋問するサンヒドリンの議員やポンテオ・ピラトの面前でじっと黙ったまま無力に鞭打たれ殴られ苛められているこの人が、救い主である、ということに、「アーメン、そうです。主よ、あなたこそわたしの救い主です」と言えなければなりません。まったく無抵抗のまま十字架に釘付けられて殺されてしまったこの人が、救い主である、ということに、「アーメン、そうです。主よ、あなたこそわたしの救い主です」と言えなければなりません。無惨な姿となって冷たい墓に葬られたこの人が、

三日目に復活して出て来た、ということに、「アーメン、そうです。主よ、あなたこそわたしの救い主です」と言えなければなりません。

知識と知恵は、信仰と対立するものではなく、むしろ、信仰に至る手助けをするものであるが、しかし、主イエスキリストを救い主としてお迎えするという一点においては、知識と知恵は、へりくだらされる。これが、今日第三におぼえたいことであります。

最後に、三人の博士たちはそれぞれ、黄金、乳香、没薬を、イエス様におささげしました。

第一の博士は、王として統治されるお方、勝利者としての主イエスキリストのお姿を、幼子イエスのうちに、見ておりました。黄金は、王、統治者、勝利者を象徴する贈り物です。

第二の博士は、神の前に香をたいて、とりなしの祈りをささげる、大祭司としての主イエスキリストのお姿を、幼子イエスのうちに、見ておりました。乳香は、礼拝、祈り、祭司、とりなしを象徴する贈り物です。

第三の博士は、十字架につけられ、犠牲の死を遂げ、墓に葬られる、贖罪者としての主イエスキリストのお姿を、幼子イエスのうちに、見ておりました。没薬は、遺体を処置して墓に葬ることを象徴する贈り物です。

第一の博士が理解した主イエスキリストのお姿だけで、十分だったと言えるでしょうか？ いいえ。十分ではありませんでした。イエスがただ勝利者であるというだけでは、真理の片面であります。

では、第二の博士が理解した主イエスキリストのお姿だけで、十分だったと言えるでしょうか？ いいえ。やはり十分ではありませんでした。イエスがただ大祭司というだけでは、真理の片面であります。

では、第三の博士が理解した主イエスキリストのお姿だけで、十分だったと言

えるでしょうか？ いいえ。それでも十分ではありませんでした。イエスがただ贖罪者だというだけでは、なおも真理の片面であります。

第一の博士と、第二の博士と、第三の博士と、三人がそれぞれに把握し理解しているところの主イエスキリストのお姿が、三つとも合わさって一つとなることによって、初めて完全な主イエスキリストの把握、完全な主イエスキリストのお姿の理解へと、至ることができるのです。

メソジスト教会の創設者、ジョン・ウェスレーは、「キリスト教とは孤独な宗教ではなく、社会的な宗教である」と申しました。それはつまり、ひとは、自分一人だけでは、主イエスキリストを完全に把握し理解することが出来ない、ということです。わたしには、キリストと、キリストにあるほかのひとの助けが必要だ、ということです。

ひとはまず、自分がイエスキリストと出会って、イエスキリストを自分なりに把握するのではありません。その上で、ひとは、ほかのひと、つまり、イエスキリストと出会ったほかのひとが、そのひとなりにイエスキリストをどう把握しているのか、ということを知るのでなければなりません。それを知るためには、自分とほかのひととの間に、キリストイエスにある開かれた交わりがあるのでなければなりません。この交わりこそが、教会です。

二人または三人が心を合わせて祈っているところに、わたしもいる、と主イエスはおっしゃいました。わたしが認識するキリスト。あのひとが認識するキリスト。このひとが認識するキリスト。わたしと、あのひとと、このひと。これら三つの認識が、キリスト者の交わりにおいて分かち合われ、共有され、ひとつとなるときに、完全なキリストの把握ということが可能とせられるのです。

わたしたちは、三人の博士のようであるでしょうか？ わたしたちは、自分ひとりだけで、主イエスキリストを求めようとしていないでしょうか？ それとも、主イエスキリストとの交わりにある信仰の仲間たちと一緒にあって、その交わりの中で、その交わりにおいて、その交わりと共に、主イエスキリストを求めようとしているのでしょうか？

わたしが、わたしの知ったキリストを、ほかのひとに分ち合うこと。これが、あかしであります。ほかのひとが、そのひとなりに知ったキリストを、わたしに分ち合ってくれること。これが、あかしであります。この「あかし」において、キリストイエスについてのわたしたちの共同の認識は、いよいよ深められつつあるのでしょうか？

わたしたちはだれも、自分ひとりだけでは、キリストイエスのお姿を完全に把握することができない。わたしたちには、信仰の仲間と一緒にキリストを分かち合うということが、どうしても必要だ。これが、わたしたちが今日最後におぼえたい点であります。

お祈りいたしましょう。

恵み深い天の父なる神様。わたしたちがイエス様と出会うときに、その喜びのゆえに、わたしたちの過去の記憶が、変えられてしまうことができる、ということを感謝いたします。このことが、わたしたちの身に起こりますように。

恵み深い天の父なる神様。三人の博士たちは星に導かれて進み続け、ついに、主イエスキリストと個人的にお会いすることが出来ました。わたしたちもまた、主イエスキリストと個人的にお会いする、という尊い経験をこの身に味わうまで、進み続けることができますように、お導きください。

恵み深い天の父なる神様。あなたがわたしたちにお授けくださった知識と知恵とは、決して信仰と対立するものではなく、信仰に至る手助けをするものであることを、感謝いたします。しかし、わたしたちがいよいよイエスキリストを救い主として信じ受け容れるという一点においては、知識と知恵はへりくだらなければならない、ということ、忘れずにおぼえることができますように。

恵み深い天の父なる神様。わたしたちは、だれも自分一人では、主イエスキリストを完全に把握することが出来ない、ということ、おぼえることができますように。わたしが、わたしの知ったキリストを、ほかのひとに分ち合うこ

とができますように。ほかのひとが、そのひとなりに知ったキリストを、わたしに分ち合ってくれることができますように。このような「あかし」によって、イエスキリストについてのわたしたちの共同の認識が、長さにおいても、高さにおいても、深さにおいても、いよいよ豊かにせられて行くことができますように、お導きください。そうしてついには、イエスキリストの完全な認識に至ることができますように、お助けください。

主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン